



きらつと教育

晩年を迎えたあるシスターは余暇を利用して随筆を書き始めました。過去を追憶しながら、あるいは、日頃から考えていることなどを気の向くままに書き留めた文章の中に「きらつと光る」教育的な示唆があります。

8回シリーズの第4回目です。どうぞ、味わってください。

4 MY BOY

今から25・6年前のことである。あきらという3歳児が入所した。性格が気難しく、母の愛をあまり受けていないようで、担当者は手を焼いた。私はできるだけ担当者の負担を軽くするために、どこへ行くにも連れていった。

ある日、私はあめの袋を倉庫に持って行く途中であきらに出会った。彼は目ざとく、アメの袋だとわかり、走りよって「アメ頂戴」と手を出した。「まだ口が開いていないのであげられない」と言って、そばにいた保母と話していた。ふと見ると、あきらが口を開けてその場に立っていた。

「あきら、そこに立ってなにしてるの」「シスターが口が開いていないから、だめと言ったろう？」と答えた。私は驚いた。仕方なく袋の口を開けてアメをあげると、「ありがとう」と走って行った。すこし知恵おくれか、仲間の中ではもめごとが多かった。

彼が5年生の時であったか、大声で泣きながら、私の部屋の戸を無造作に開け、ソファーに座って、しゃくりあげて泣いていた。「また喧嘩して泣かされたか…」と思い、黙って仕事をつづけた。

少し落ち着いたかと思われる頃、「あきら、そこにアメがあるよ」と一言教えたと、彼は涙をふき、アメの缶に手を入れ、一つ口に入れ、2・3個ポケットに入れた。「何か言いたいことがあるの」「ない」と、にっこり笑って出て行った。

あきは中学校を卒業し、8年ぶりに訪ねてきた。背丈は180センチに近い。「あきら、大きく伸びたね、私は背伸びしてもあなたに届かないし、椅子にのぼるとあなたの顔をはっきり見られるわ」、あきはにっこり笑って、私を見下ろした。昼食をしながら、「ひとり暮らし、何を食べているの」と聞くと「カップラーメンと牛乳とパン」と答える。「あきら、おなかがすいたら、シスターの所においでね」と言うと、「うん」と頷いた。体は大きいがまだまだ子どものようなところもあるなあ…と思った。

「シスター元気だな」と、グローブのような大きな手を差し出して 痛いほど強く握った。温かい手であった。

(シスターK.M.)。